

日中戦争開戦前後における 日本医学界の中国・中国留学生観 ——医薬支援団体「同仁会」の機関誌に見える言説から

見 城 悌 治

はじめに

近代日本で学んでいた中国留学生は、日露戦後に1万人を越えたが、それは明治から昭和前期までのピークであった。その後、1911年の辛亥革命で帰国者が相次いだこと、また1915年の「21か条要求」など对中国政策に対する反発が生じたことなどから、その後の留学生数は数千人台に減少停滞していく。しかし、1930年代に入ると、「満州国」成立という政治的な事情があったものの、日中戦争開戦（1937年7月）前には、ふたたび中華民国留学生約4000人、「満州国」留学生約2000名となり、戦前期第二のピークを迎えることになる⁽¹⁾。

さて、戦前期の中国留学生の動向や日本の知識人による留学生認識を知るための史料（雑誌）に、中国留学生の支援団体・日華学会の発行になる『日華学報』⁽²⁾と中国に対する医薬支援団体同仁会の発行になる『同仁』⁽³⁾がある。日中戦争勃発は、両国間の文化交流や留学生の行き来に甚大な影響をもたらした。しかし、盧溝橋事件以降の展開が宣戦布告を伴わない「事変」として処理されたため、留学生を含むヒト・モノ・カネの行き来が遮断された訳ではなかったのは周知のとおりである。

この時期の研究課題は、両雑誌の検討を含め、少なくないが、同仁会は、日中（医学）文化交流や中国留学生（帰国留学生を含む）の役割について、日中開戦以降にどのような認識を持っていたのであろうか。同会は、『同仁会三十年史』（1932年）、『同仁会四十年史』（1943年）の正史を自らまとめているが、研究は必ずしも活発に行われてきたとは言えない⁽⁴⁾。1945年を終点とすれば、日中関係は1937年の盧溝橋事件から八年もの「不和」が続く

ことになり、その全過程の検証は当然必要となってくるだろう。しかし、質量ともに膨大な作業になってしまうため、本稿では、1937年7月の戦争勃発を挟む時期、具体的には1937年1月から1938年2月までに発行された雑誌『同仁』上における言説に限定し、その特質をまずまとめていく。それによって、「事変」直前期の中国認識と王克敏をリーダーとする「臨時政府」が誕生し、「いったんの収束を迎えた」と日本側が捉えた時期の中国認識などを明らかにしていきたい。

1 1937年前半期における『同仁』誌の言説とその特色

① 活動評価の広がり と 冷静な中国理解

盧溝橋事件が7月に勃発する年となる1937年の1月号に『同仁』誌は、次のような「編輯後記」を掲げた。

弊誌が年頭の恒例として編纂する同慶帖の讃助者頗る多く、其の数は六百三十余名を算し、昨年に比して実に約百名、二十%の増加である。誠に有難いと同時に愈々重責を感ずる次第である。

かように一般人士の中国に対する関心は確に深くなっては来てゐるが、其れにも拘らず、中国に対する理解に至っては必ずしも正鵠を得たものばかりではない。

(略—中国は) 宗教に、学問に、軍備に其他凡ゆる方面に於ける建設が逐日進むのであるのみならず、中国人には歴史的に希薄であった国家觀念が、青少年の間に濃厚に醸成されつつあるのである。(略) 中国の医療方面に於ける進歩も亦一般の例に漏れず、頗る見るべきものあって、其の方面に於ける文化的指導の必要は久しからずして、消失するにはあらざるかとまでに觀察されてゐる。(略)

我が同仁には、常に之等各方面の真相を伝へて、わが国民の中国に対する正しき理解を深め、東亜民族将来の繁榮に貢献したい念願である。

(p 119)

冒頭に記したが、日中開戦前に中国人留学生数は戦前期第二のピークを迎えていた。そうしたなか、医薬留学生を初めとする中国医学界への諸支援を行っていた同仁会が、自らの評価の高まりに率直に驚きかつ喜びながらも、日本の中国理解が「必ずしも正鵠を得たものばかりでない」と謙虚に語っていることは注目に値する。そののみか、中国側の「国家観念」醸成を認識すべしとの評価は、後世から見れば、正しいものであったと言える。

このような「見解」を正月号で示した『同仁』は、1937年前半期において、どのような論説を展開していったのであろうか。

この一月号には、前年9月に中国訪問をした小野得一郎（同仁会専務理事）⁽⁶⁾の所感（「支那に旅して」）が掲載されている。そこで小野は「中国人が個人的交際に於いては、極めて情誼を重んじ、非常に親切である」こと、「医事衛生方面が特に著しく発達充実している」ことを評価している。後者の感想は大都市・上海の新建設物に対するものであったが、一昨年に訪中した時の比較においても、中国の人々が「献身努力を惜しまず、着々其の実現に努めてゐることをはっきりとみてとった（p 45）」と、その「発達」ぶりを礼賛している。

続く二月号には、佐藤秀三⁽⁶⁾（東京帝大教授・伝染病研究所所員）の「鮮満支遍歴所感」が載った。佐藤は、前年1936年9月16日に東京を発ち、朝鮮・「満州」を経て、北平、済南、青島、上海、南京、杭州の視察や大学での講演を行なった後、11月2日に帰国した。この大旅行の所感を、「朝鮮」「満州」「中華民国」に分けて、佐藤が綴った中に、北平、済南、青島の同仁会医院を実地に視察した感想が残る（漢口の同仁会医院には赴かなかった）⁽⁷⁾。

佐藤は北平医院の評価を、「遺憾なき能はず」とし、「物的要素に於ては全く現今の我邦の医学を代表するに足らぬもの」と手厳しい批判をした。その真意は、震災後の東京に新病院が続々建てられているのであるから、アメリカ系の協和医院に劣らぬ「新進日本を代表する」立派なものに建て替えるべき、という主張であった。それさえ出来れば、「我文化の真の扶植となり、中国人をして長く之れを徳とせしむることにならう」と強調した。

さらに佐藤は旅行中「医療に国境がない」ことを実感した旨を述べ、「医

学に於て結ぶ心の友は、真に永遠の心の友である」ので、「中国よりの留学生は十分に吟味し真に学問の深味に進み入り、医学の真髄を掴み得る人士を選び、共に学問の道に進みたい」（p 30）と留学生の受入れ、交流の意義を高評した。

佐藤のこうした認識が理想と現実を踏まえたものであるとすれば、同じ二月号において、「渡支以来一ヶ年」の経験を持つ石橋俊（医学博士、眼科）が、国際関係における日本の医事勢力の弱さに懸念を示していることに注目される⁸⁾。

石橋はまず北平に残る宮殿などから「気于雄大な民族意識の表現の一斑」が窺われるのであり、現在の中国が世界文化に遅れているとすれば、支配階級の利己的争闘のためであり、民衆の罪ではない。「今や中国は目醒めつつある。而して、特有なる底力を持って飛躍を試みんとしてゐる事を忘れてはならない（p 36）」と主張した。

そして「医事衛生に就いても同様のことが言い得る」とした上で、中国各地に医育機関が設けられ、各国の大家の招聘により、医学の普及がなされ、とりわけ米英独仏が競って医育機関を設けているとの認識を示す。しかし、その中で日本が「斯かる機関の片影さへも、最も緊密な指導者たる吾国の施設せるを見る事が出来ぬのは、実になげかはい」と叫ぶ。また「中国の医学留学生は逐年減じつつある。是等種々の事情から、中国に於ける中国に於ける日本の医学的勢力は以前よりも急激に減じて、之に代るに欧米派は漸次勢力を強めつつある（p 37）」と指摘する（この時期の中国人の海外留学の動向については、後で述べる）。

つまるところ「日華親善百年の計を謀るには、青年を教育するが最も賢明な策である。而も其中緊急を要するのは、医育機関であると思ふ。もっと早く日本の官民が此事に気付いたならば、恐らくは排日などと云ふ嫌な気分を味はずにすんだ事だらう（p 37）」と見る。

そして、石橋は自らの提言をこう結んだ。「東亜の盟主たる日本が将来中国の医事衛生を如何に指導すべきかは、両国の国交にも重要な関係を持つものと考えられる（p 39）」云々。

1937年初頭の言説ではあるが、石橋は「東亜の盟主」である日本が、い

かに中国を「指導」すべきかを熱く語る。しかもその「指導者の姿勢」は医学の支援協力という行為に止まらない側面もあった。すなわち、中国における西洋列強の勢力浸潤を背景に、排日感情を正し、日中親善へという国交関係に影響を及ぼすような学問（医学）を立ち上げるべき旨を積極的に論じ、かつ留日学生減少などの現況について危惧するのであった。

② 永井潜の北平大学医学院名誉教授就任と帰国留学生たち

そうしたなか、東京帝大名誉教授の永井潜⁽⁹⁾が1937年4月、同仁会の尽力と外務省文化事業部の援助により、北平大学医学院に名誉教授として赴くこととなった。講義は三期にわたり、第一回は4月から7月、第二回が1938年1月から3月、第三回が同年9月から12月で、生理学総論などを講ずる予定とされていた。この紹介記事の最後には「最近俄かに日支関係が逼迫して、中国の一部では対日開戦論まで持ち上がってあるこの時、日支外交の癌とされる北支へ科学の使徒として赴く博士には、同時に“平和の使節”とも期待されるわけである」⁽¹⁰⁾と、政治的な困難を解決する起爆剤になることへの希望が示されることになる。

北京に到着した永井の歓迎会（5月8日）についての記録も残る⁽¹¹⁾。中国側の主だった参加者として、北平大学校長の徐誦明、同医学院長の呉祥鳳、北京大学校長の蔣夢麟、北京大の湯爾和、清華大学長・梅貽琦、女子文理学院長・許寿裳などの大学人の名前が挙げられ、他にも「大使館の文武官、東方文化事業部、同仁会関係者等百数十名」が出席したとされる（p 85）。これら中国の文教関係者のうち、元日本留学生は九州帝大卒の徐誦明、千葉医専卒の呉祥鳳と金沢医専卒の湯爾和であった⁽¹²⁾。許寿裳も、1902年に日本に官費留学し、弘文学院在学中に周樹人（魯迅）と知り合い、生涯の友となったことで知られる。帰国後は北京大学教授などを歴任した人物である⁽¹³⁾。一方、蔣夢麟は、米国コロンビア大学で教育学士を取得した後、さらにコロンビア大学で哲学博士を取得した「欧米派」であった⁽¹⁴⁾。梅貽琦も米国のウースター工科大学で学士、シカゴ大学で修士を取り、清華大学長に就いた人物である⁽¹⁵⁾。

つまり、永井の歓迎会には元留日学生でしかるべき地位に就いていた人物

とともに、「欧米派」と目されていた当該期の主要大学長も出席していたのである。

永井の歓迎会記事を書いた『同仁』（1937年6月号）の編集後記（p 108）は、次のような述懐を示した。「中華民國は目下凡ゆる方面に於いて、建設の途上にあるといつていいであらうが、医学に於いても亦さうである。医政、医育方面等の如く、組織、構成を主とする方面は着々と整備し、社会衛生組織の秩序等に至っては、相当見るべきものがある。（中略—ところが）之を運用すべき学者は至って乏しく、従つて実績は必ずしも、未だ挙げるといひ得ないである」。

さらに続けて、中国視察から戻ったある人士の意見として「近年の中国留学生は素質が悪い」という嘆きとともに、「従来、吾が日本の医界は、中国に対して凡医でいいから一人でも多く送るがいいといふ様な傾きがあった。而し、之は決して適切な方法では無い。一人でもいいから、後進を指導する力と熱のある有為の学者を送り、それを通じて、多数の医者を教育する方針を取るべきである」という所論が語られていた（このような認識を背景として、東大名譽教授永井の派遣が行われたものと思われる）。

ところで、同仁会が1935年に編集発刊した『中華民國医事綜覧』には、中国で活躍していた4773名の医師の名簿が収められている⁽¹⁶⁾。そのうち、海外留学（研修を含む）経験者は775名（全体比16%）であり、留学先で最も多かったのは日本で500名を数える。前述のように留日経験者は大学や行政などの要職に就いていた人も少なくなかった。その一方で、欧米などへの留学者は、アメリカ118名、ドイツ100名、フランス21名、イギリス20名、オーストリア5名、ニュージーランド3名、カナダ1名、スイス1名、イタリア1名、フィリピン2名、安南（ベトナム）1名、「印度支那」2名となっていた（日本留学生500名と併せ、総計775名）。

『同仁』誌には、折々欧米留学者の結束が「脅威」として語られる言説が載せられたが、実際の数値としては、日本留学者が多数勢力であったことを確認しておくことは必要だろう。

2 盧溝橋事件勃発後における『同仁』誌の言説とその特色

① 「政府声明」への懲瀆と編集方針の変更

1937年7月7日に起こった日中軍事衝突をめぐる動向が『同仁』誌に反映されるのは、同年9月号からであった。同誌冒頭には「政府声明」が二頁にわたり掲げられている。いわく「帝国夙に東亜永遠の平和を冀念し、日華両国の親善提携に力を效せること、久しきに及べり。然るに、南京政府は排日抗日を以て国論昂揚と政権強化の具に供し」てきた。そして、「中国側が帝国を軽侮し、不法暴虐至らざるなく、全華に亘る我が居留民の生命財産、危殆に陥るに及んでは、帝国としては最早隱忍其の限度に達し、中国軍の暴戾を膺懲し、以て南京政府の反省を促す為、今や断乎たる措置をとるの已むなきに至れり（下略）」云々。

ここには、中国側の感情を一切顧みず、日本側の「正当性」のみを主張し、激しい批判を浴びせる「暴支膺懲」論が明確に表れていた。

それに続いて掲げられたのは、「日支事件と同仁会」と題する無署名の文章である。開戦前、同仁会は、北平、青島、済南、漢口の4都市に「同仁医院」を開き、日本人居留者と中国人の診療に当たっていた。そうしたなかの「七月七日盧溝橋に起こった事件は、またたく間に全北に波及し」た。八月初めには漢口を離れる居留民とともに、漢口医院は8月7日に閉院した。済南医院も8月16日、青島に引き上げたが、青島も「漸次險悪になった」ため、8月下旬に医院を閉鎖し、関係者は日本に引き上げた。「戦火は今や全支を蔽ひ、我が同仁会が中国に於いて経営する四医院の中、現在事業を続けてゐるのは北京医院只一つである。之とても、硝煙纔に消えたばかりの地にあるのであるから、本より常態に復してゐないことは言ふまでもない」（p. 3）という現況に立ち至る。

この筆者は、日本も中国も戦線拡大を望まなかったのに、数ヶ月で全土に広がってしまった原因は、国民党政府成立以来二十余年の「排日侮日の国策」と教育方針としての「排日抗日意識」にあると断ずる。そしてその種を播いた政府が「事変」を統制終息できなかつたことは「日本の迷惑は勿論であるが、中華民衆にとっても亦大なる不幸である」と歎じた。同仁会は、以前か

ら、「一再ならず此の点を指摘したのであったが、国際文化の重要性が十分に認識せられず、終に事茲に至ったのは、実に痛恨の限りである」(p 4)とも述べた。

一方、欧州戦争以降、各国が展開している「国際文化政策」と比較して考えるに、「我が同仁会の事業は已に三十五年の歴史を有し、その目的も国家的政策とか民族的利益とか云ふのでは無く、全く人類愛から出発したものであるとする。国家や民族を超えたその精神は赤十字と全く同じであるが、その活動が戦時に行われるのに対し、同仁会は平時に展開しており、「人類の疾病から生ずる一切の不幸を救はんとするもの」であると、同会の趣旨目的を改めて確認した (p 4)。

このような言説の展開は、同仁会が1902年に創設されて以来の「普遍的思考」であることは間違いないだろう。しかし、日中開戦という事態は、その「理念」に安住することを許さなかった。すなわち、「今回の事件に於いて、皇国の目的とする処は巻頭政府声明に依って明らかなるが如く、容共抗日を以て国策とする一部為政者の反省を促すにあ (p 4)」るとし、同仁会は「政府声明」に従うことを明言するのであった。

しかし一方で、「中華民国の一般大衆に対しては、何等敵意を持するもので無い。寧ろ無辜の彼等が戦禍を蒙るについては、無限の同情をさへ懐く (p 4)」と、「大衆」には敵対しないことを強調し、文末は「不日事件が平靜に帰せば、旧に倍して伸展し得るに相違ないと確く信じ、且つ之が対策を忽にせぬのである (p 6)」と結んだ。

すなわち、開戦直後の「日支事件と同仁会」と題する巻頭論文は、「中国大衆」に多少の配慮をしつつも、「国策」に従うことを明言するものであった。

なお、こうした政治的な言説とは別に、同じ号に収められている四つの同仁会医院の開戦後の対応記録(日録)は、「歴史資料」としてきわめて重要である。それは「北支事変後の北京医院」(7月7日～8月26日)、「漢口医院引揚げ事情」(7月20日～8月16日)、「済南医院の青島に引揚げるまで」(7月29日～8月2日)、「青島医院遂に引揚ぐ」(7月27日～8月30日)の日録のほか、「漢口引揚げの記」(同仁会漢口医院長・武正一⁽¹⁷⁾)、「済南医院惜別の感懐」(同仁会済南医院・外田麟造)、「青島を去って」(青島医院長・

栗本定治郎)などで、関係者の「感懐」が載せられるとともに、「同仁会記事」欄(p 50~53)には日本に引き上げた職員の氏名や現住所さえも記録されている。

それらの紹介は本稿で割愛せざるを得ないが、傷病者治療と戦地からの引き揚げという「矛盾」に当事者がどのように対処したのか、何を考えたのかの記録として貴重である。

それは措き、ふたたび『同仁』誌に見える日中開戦時の言説の検討に戻ろう。9月号には、同仁会編集部による「謹告」が「昭和十二年九月十日」付けで掲げられた。そこにいわく「本誌は従来同仁会事業の宣伝機関として、又日支医界の連絡機関として記事を選定し、且つ読者の中国に対する関心を期待して、中国趣味的な記事も相当多量に登載したが、当面の時局、余りに重大なれば、当分の間は時局の進展に伴ふ、本会事業の推移の報道に専ら努力するを至当と考慮し、爾今編輯方針を一変せんとする(p 49~50)」云々。

つまり、幅広い中国文化紹介などをするにより、日本国内の中国理解を高めようとした方針を止め、「時局」に沿う形での編集方針に変更する旨が宣言されたのである。半官半民団体の同仁会としては、それはどうしても抗ずることのできない枷であった。

② 「同仁会診療救護班」の結成と中国派遣

前掲の事情もあり、『同仁』10月号は、当然のように「戦時対応号」となった。まず巻頭には、中国に派遣するため、急遽結成された「同仁会診療救護班」の写真が6頁にわたり、掲載されている(「宮城奉拝」、「明治神宮参拝」や班員の集合写真などである)。

そして「巻頭言」には、同仁会会長の林権助¹⁸⁾による「同仁会診療救護班各位に告ぐ」が掲げられた。いわく「支那事変の拡大に伴ひ、我が同仁会は支那に於ける居留民を始め、一般傷病者を救療し、且軍の宣撫工作に協力するを目的とし、診療救護班を編成し、北支方面に派遣することとなった。

(略)就いては、各班員は十分に此意を諒得せられ、須らく滅私奉公の誠を尽され、協心戮力任務の遂行に邁進せられんことを切望する(p 2)」云々。

それに続く「同仁会活躍の秋」(無署名)には、次のような見解が示され

ていた。「今回の支那事変は、日本政府の屢々声明した如く、中華民国を敵とするものではない。只抗日排日を目論み、蘇聯容共を国策とする一派の政治的権力を排除し、日満支提携して、平和且つ明朗なる東洋人の東洋建設を目的とする以外に、他意は無い」。

そして、「兵火劫掠の厄に遭った」良民を救うため、戦時下の宣撫工作として「診療救護事業は最も重要なもの、最も効果的なものであると確信する」。「幸我が同仁会は多年中華民国に於いて、文化事業として、衛生文化の発達に努め、(略)民衆の救恤に力め来りて、経験と組織とを持してゐるのであるから、今回の如き非常時こそ正に奉仕すべき絶好(語弊あれば諒恕を乞ふ)の機会であると信ずる」(p 3)と述べ、中国民衆を「診療救護」することが自らの役割であるとアピールした。

その具体的行動として、「其の筋よりの命令」によって、閉鎖した漢口、済南、青島の「本会病院の職員約数百名を動員して、同仁会診療救護班を編成し、北支に派遣」したことが紹介される。そして、軍事行動が終息した後には「何を措いても、診療救護の方面から彼我融和の道を開拓していくのが最も捷徑であることは疑のない処である。(中略)之こそは異種民族結成の紐帯である。今や將に多年此の方面に尽瘁し来れる我が同仁会の活動すべき秋という所以である」と結んだ(p 4)。

ここに見える「同仁会診療救護班」(巻頭の口絵写真でも紹介)は、9月12日から「外務省、陸軍省、海軍省、赤十字社等関係方面」との交渉・打ち合わせによって、三班編成で誕生した組織で、10月6日に東京を立ち、漢口、済南、青島に向かった⁽¹⁹⁾。

同仁会専務理事として、救護班に帯同し、中国に渡った小野得一郎は、11月号に「北支の旅行より得たる感想」を寄稿している⁽²⁰⁾。いわく「今回の事変が支那民衆に及ぼした影響は如何と云ふに、何と言ふて戦敗国民の悲惨なる有様を第一に挙げねばならぬ。一切の産業は破壊され、教育の施設、衛生の設備等悉く壊滅に瀕し、一般民衆の窮乏は、其の極に達してゐる」。小野はキレイごとを一切排除した、厳しい現実のみを述べる。

さらに「特に見逃すことが出来ないのは、排日、抗日の意識が以前に比して、一層熾烈深刻になったことである」。開戦前の「排日、抗日」は一部の

宣伝また煽動による一つ的手段に過ぎなかった。しかし、開戦後は、民衆の多くが家族や家屋・財産を失い、途方に暮れている。こうした体験をもった民衆が、「従来の思想的排日から斯の実践的排日に進むで、一層深刻熾烈を加ふるに至るべきは、寧ろ当然のこと」とし、ある意味では、至極当然のなりゆきについて、冷静な現状分析を示した。

その上で、小野は「然らば之に対して如何に処すべきかと言ふに、善政を布くより他はない。之が唯一無二の方策であると思ふ (p 3)」と断じた。しかし、そのための「宣撫工作」には相当の時間がかかるし、一時的なものはいけなめいと言う。そのため六ヶ月を一期とする「診療救護班」を派遣したのだが、今後は、時間を長期にし、班員も増加させるなど、同仁会のこれまでの方針を調節する必要があると主張した。

すなわち、これまでは「文化的事業」方針に基づき、「主として日本の高度医学の紹介普及に力め、依って以て支那の文化開発に貢献」することを目的としていたのだが、今後は「寧ろ救済事業に重きを置き、施療若くは軽費診療の方面に進む」ことが適切と痛感したことを吐露する小野であった。最後は、そうした施策を展開することによって、戦後の中国に対し「和親共栄の実を挙ぐる上に貢献することを得るのではなからうか (p 3)」とまとめている。

現地視察を果した小野は、中国民衆が悲惨で窮乏の極みに達しており、結果として「排日」が深刻熾烈になっていること、それを改善せしめる方法としては、「高度医学の紹介普及」ではなく、救済、施療が一番であることを関係者に強く訴えたのである。

③ 「戦後」への展望

小野の報告中には、「戦後」への展望が早くも示されていたが、医学博士・西村泰も、戦後には「北支に十大病院を建設せよ」との論考を11月号に寄せている。「今日北支の民衆は我が医術の真価を認め、日本医師への信頼大なるものがある。これに対しては、今日までの同仁会其他の医療施設や、中国にその地盤を開拓せる本邦医師諸君の労を多とせねばならない。排日毎日の熾んなる時に於てすら、日本の医術に対する中国民衆の信用は絶大なものが

あったのである」。よって今後は「先づ医術を通じて彼等の手を握り、親善の実をあぐるのが最も賢明の策と思ふ (p 35)」。そして十都市に病院を建設せよ、と主張した。「仮に」として、あげられたのは、北京、天津、青島、濟南、滄州、保定（または石家莊）、張家口、綏遠、大同、太原であった。

西村は「兵火の厄を蒙った北支主要都市も已に復興の氣運に向かっている」以上、「計画を樹つるも決して早すぎはしない」とまとめる（摺筆の日付は、「11月3日」であった）。すなわち、これも「戦後復興」を見込んでの提言であったと言えよう。

一方、12月号（11巻12号）には、永井潜による「北京滞在中の所感」が載せられた。先にも少し紹介したが、永井は北平大学医学部名誉教授に就き、集中講義をするため、37年4月に北京入りした。全3回を予定する講義の1回目が終わり、北京を7月7日に辞去したのであるが、それは偶然にも盧溝橋事件が勃発する日であった。

永井の所感は北平大学での講義の感想のほか、義和団賠償金によるアメリカ、イギリスの教育支援と日本のそれの比較からなる。後者については、1902年から活動を行っている同仁会が引き合いに出された。「日本の医学進出のために苦心して居るもので、病院を作り、医学薬学の著書の紹介をすると共に、留学生の面倒を見る等のことをして居るのであります。然し、此の機関の最も華々しかったのは、過去のものの様に思ひます。其れは後になって北京の共和医学院や濟南の齊魯医学院の如き大きな機関が出来たために、此のものの有難みが薄らいだ様な感があります。今日では其の意味から云っても、唯診療機関と云ふのみならず、医育機関を設けねばならぬと云ふことを感ずる (p 15)」云々。

すなわち、同仁会が中国に設けた病院が、規模や内実からすでに過去の産物になっているという直言であった。そして、その重要性を同仁会幹部も理解しているものの、金銭面から難しいらしいとして、こう続ける。「外務省の文化事業の方でも、支那文化の開発になることを色々と考えて居るのですが、仏国、米国、英国に比すれば、如何にも貧弱であります。例へば、上海にある自然科学研究所は誠に良いものでありますが、支那人に云はせると、日本人は支那の土地を研究して、自分達の研究を満足させて居るのみで、支

那のためには何もならぬと露骨に云ひます。北京近代科学図書館も日本語文献がほとんどで、「日本語の出来る人に読ませる(p 16)」ための代物になっていると、きわめて辛辣的な見解を述べた⁽²¹⁾。

また、永井は、事変が解決した暁には、「明朗な日本と支那の接触が迎えられるべき」であるが、「東洋平和のため、将又日支の親善のため、引いては世界平和のため、日本文化を支那の土地に植付ける第一線に立つべきものは医学なりと信ずる」(p 16)との希望的観測を語る。さらに、中国で活躍している医学の「教師は外国に留学した者も多数居りますが、日本に留学した者が最も多い」と元留日学生についても語る。現在「日支の間に戦争が行はれて居りますが、(略)本当の文化的の意味に於て、日支は手を握って行かねばならぬ(略)支那を正しく認識して採るべきものは採り、尊ぶべきものがあれば、尊ぶべきであります。私共日本人は日支戦争以来支那に対する見方が変って、採るべきものは全くないと思ふ様になったのは誤って居ります」。

また日露戦争後に中国に派遣された日本人のなかに、不適任者も多く、中国を侮辱した人もいた。このような日清日露戦争の誤りを繰り返すことなく「自己の本分より医師として皆様共に、此の大事な使命に当らんとするの覚悟を有すべきであると考へる(p 18)」というのが、永井の主張であった。

1935年段階における中国人海外留学者の行き先については先に紹介したが、日本留学者は全体の三分の二にも及んでいた。永井は、元留日学生が両国の橋渡しになることを期待するとともに、日本側の偏見や問題点を取り除くべき旨も強調するのであった。

3 「新政権誕生」と中国留学生をめぐる思惑

① 王克敏政権の誕生と『同仁』誌の所感

さて、永井の「所感」が載った12月号の「雑報」欄に、「中華民國新政権生る」の記事が見えた。「京津の地漸く平静に帰し、南京亦陥落するや、予ねてから中国要人の間に胎動してゐた新政権樹立の運動、俄に進展して、去る十二月十四日(略)中華民國臨時政府樹立の式典を挙行し、宣言を發表し、

政府組織の綱領を定め、各委員を任命して、新生中国の中央政府たるべき閃を見せた (p 35)」云々。

この「臨時政府」は行政委員会委員長の王克敏を実質的な指導者とする政権であった。そしてその議政委員会委員長に就いたのは、湯爾和⁽²²⁾である。湯は、1907年に金沢医学専門学校を卒業した元留日学生であり、1912年に北京医学専門学校や浙江医学専門学校を創設するなど中国に近代医学を普及するため、きわめて大きな役割を果たしている。つまり日本側からすれば、元留日医薬学生のなかで最も活躍が著しい、代表的な人物であった (1929年には京都帝大から医学博士号を取得している)。

それを受け、12月号は2頁あまりを割き、「湯爾和先生のシルエット」と題する紹介記事を載せた。そこでは、経歴などのほか、同仁会との「深い関係」が示されていた。すなわち、会の評議員68名中、唯一の中国人であること、また同仁会が主宰する「中日医薬学生談話会」と「日本の医書の支那語翻訳刊行会」の顧問であることなどである。したがって、文の最後は「東亜民族の爲め慶賀に堪へぬと同時に先生の検討を祈って止まぬ (p 34)」と結ばれ、湯に対する「期待」が余すところなく語られることになる。

さて、1938年の『同仁』新年号冒頭の「年頭の感」は、以下のようであった。すなわち、事変勃発から半年あまりが経ち、遂に「親日防共を標榜する新政権」が樹立された。それを評価しつつ、さらに「善導して過りなからしむるは、友邦日本の義務であり、東亜の安定勢力、東亜の盟主を以て自ら任ずる日本の責任である」(p 2)との決意表明が示された。

また同号は、開戦および「新政権誕生」後初めての正月号ということもあって、「事変」をめぐる所感と今後の日中関係に対する見通しなどをめぐる識者の見解が12本も並べられた。①侯毓汶「北支今後の衛生建設に対する希望」、②入澤達吉「北支衛生対策の要諦」、③孫魁舟「真の親日は知日から」、④飯島茂「同仁会病院事業に対する卑見」、⑤佐多愛彦「日支医学の提携を提唱す」、⑥澤村幸夫「大公無私の文化であれ」、⑦布施知足「北支の文化工作に就いて」、⑧七里重恵「事変下の中国大衆に対する文化工作と医療」、⑨永持静香「聖戦の後に来るもの」、⑩金子準二「精神病学から見た支那事変」、⑪安藤重郎「支那事変と青島」、⑫武正一「中国雑感」である⁽²³⁾。

この12本の中から特色的な議論を以下で紹介していきたい。まず一人目の侯⁽²⁴⁾は、さきほどの湯爾和と同じく、辛亥革命前に千葉医専で学んだ元留日学生であり、帰国後は政府機関にも勤務していた医学者である。天津特別市衛生局長などのキャリアを持つ侯は、臨時政府の衛生局長にも就いており、次のような日本支持の論説を展開した。

「国民政府の容共抗日政策が因となり、今回の大不祥事を惹起したことは、中日両国の為め、実に不幸の極である」。しかし、新中華民国が誕生し、人心の安定と更生により、前途期すべきものがある。衛生面においては、系統ある行政機関を確立すること、実施機関を創立整備して、民衆の保健に資することが必要である。そのため、「必ず日本政府の同情と援助を得なければ、所期の目的を達することは不可能で、此の点、大いに日本朝野の注意を喚起し度い」。そのために、伝染病研究所、医科大学設立への援助を期待する旨も付け加えられていた (p 3)。

一方、入澤⁽²⁵⁾は東京帝大医学部長などを歴任し、同仁会副会長にあった斯界の権威である。侯の提言を受けるかのごとく、「速成医師養成機関」「医育機関」の設立と「伝染病対策」を講じることを訴えた。

孫⁽²⁶⁾は、北京と上海がすべて破壊され、精神的物質的に大打撃を受けている、と中国人としての偽らざる気持ちをまず示す。とりわけ、北京の諸学校はすべて閉校の状態となり、教育都市としての「誇りは全く消失した」。そして「中日親善の言葉は今流行してゐますが、然し、唯だ無心に云ふものが多」い。しかし、心から理解しているのは文化方面の「日本通」のみである。「猜疑は誤解を起す」ので、それを避けるためにはやはり文化工作が重要であると主張した。

孫によれば、中国人が欧米人に好感を持っている理由は非常に簡単で、彼らの文化工作にある。それに対し、「今迄の日本はこの文化工作（中国を十分に理解した）に対して、努力が欠けてゐたのではないでせうか」と断じた。そして、「欧米人経営の小学は到る所の都市に見られ」るし、北京のロックフェラー病院の偉観に対し、隣に建つ同仁会病院は「貧弱」以外の何物でもない。つまり、「同仁会医院の事業は文化工作から見て余り成功とは言えない (p 8~9)」とまとめるのであった。

② 留日中国学生たちへの「期待」

『同仁』誌が、元留日学生で、新政権の大立者となった湯爾和について、評価・期待していたことは先に見た。

飯島⁽²⁷⁾も、元医学留学生との連携について語る。つまり、アメリカ留学経験者は「ロックフェラー病院を中心として、連絡統制が能く取れて居る故、其の人数が少ない割合に勢力が強大であると聞いた」。それに対し、十年ほど前に北京に行った時、「日本留学出身の民国医人は、相互間の連絡交通が疎である。交通しても居らぬ。東大、京大、九大、満大、千大、金大、阪大等々の出身者が、各濠を深うし壁を高うして独立独行である。従って、其の勢力は各人個々の勢力たるに過ぎぬ」との印象を述べた。

そして、今後は「独善主義を放擲させ協力合和」させることが大事であり、同仁会病院の活動も改革すべきとした（ただし「具体的な提案については紹介を略す」と加えている）。

佐多⁽²⁸⁾は、戦乱終結にともなう「文化親善の工作に向かって率先努力すべきは我々医学者に与えられた国家的使命である、世界的義務であると信ずる（p 11）」との理想を大上段から語る。そして、「支那から来る日本留学生一般に向って、及ぶ限りの懇情を尽し、教育の真価を味はしめなければならぬ。（略）我々は二十年前支那の留学生を大学に於いて、養成したのであるが、其等が支那の各地に於いて、或は官界或は民間にあつて教育医療に従事して居り、支那国民の対日感情が悪化せる近年に於ても、我々の教を受けたる昔の留学生は変るなき懇情を見せて居る。由つて、此の医学教育を介し、日支国民の親善の実を挙げ得ることは、今日に於いても決して難くは無く、進むでなすべきと信ずる（p 12）」。それに加え、「北京或は上海に医学を中心とする自然科学教育機関を作り、多数日本精神の東洋趣味医学者を始め、技術者研究家を養成すべきだと信ずる（p 12）」云々。

佐多が言う「日本精神の東洋趣味医学者」が具体的にどのような医者イメージしているかは、わかりにくいだが、いずれにしても、元留日学生を大切にすべき、という見解であったろう。

ここでは留日学生をめぐる見解を多く紹介しているので、筆者が同仁会資料を基にまとめたデータを改めて示しておきたい。すなわち、1935年に同

仁会が編集発行した『中華民国医事綜覧』に収められた中国の医師4773名のうち、海外留学経験者は775名、留学先で最も多かったのは日本で500名を数えることについては、先に触れた通りである。

一方、先の史料引用で飯島茂は、「東大、京大、九大、満大、千大、金大、阪大等々の出身者」と述べていたが、この学校名と『中華民国医事綜覧』に掲載されていた留学者数を多い順に示すと、千葉医大99名、東大89名、九大31名、大阪大16名、京大7名、金沢医大4名、満州医大本科2名、満州医大専門部9名となる⁽²⁹⁾。

また同書によれば、欧米留学者は、アメリカ118名、ドイツ100名、フランス21名、イギリス20名などであった（詳細は既述した）。本稿では日本の医学関係者が、欧米留学者、とりわけアメリカ留学者の連携に脅え、日本留学者の結束がないことを嘆じていることをいくつか見てきたが、数値の上では、日本留学経験者が圧倒的多数であったことも、また事実なのである。したがって、「戦後」の日中関係において、元留日学生との連携強化が模索されていくのは、至極当然なことであったと言えよう。

おわりに

1937年10月から、「同仁会診療救護班」を率いて中国に渡った同会専務理事・小野得一郎が、『同仁』11月号に「北支の旅行より得たる感想」を掲載した事は既に見た。翌年2月号にはその四回目が掲載されている（完結編は次号の（五））。

小野はその冒頭で臨時政府が成立し、近い将来自治権が発達するだろうとの見通しをごく簡略に述べる。しかし、その後は話題を全く転じ、中国の至る所に無数の「碑碣、刻石」が残り、民家の門扉には「楹聯、対聯」が掲げられていることを賞賛する。

「東洋民族に於て、一種の風格を具へ悠揚としてせまらず、上品にして志操の富贍なるものを求めむとすれば、かかる雰囲気の中に養成せられたる民衆の間に於てこそ見出されなければなるまい」。

「世人の多くは、兎角中国民族の欠点のみを論じ、彼等は貪欲にして財を

おしみ、衛生の思想、消毒等の観念絶無で極めて蛮野なりと罵るものが多いけれども、斯くの如きは今日の文化人より見て、その科学的知能が低劣なりと云ふに過ぎずして、これこそ自分達の尺度を以て、中国民族を計画せんとする一方的片眼観に外ならぬと思ふ。もし彼等の有する無型的文化、潜在的美質に至っては、単にその外形のみを以て論ずべきではないと思ふ。

「この方角より見たる中国民族が、数千年来養はれ来りたる大なる文化は、他の民族に求めむとするも不可能にして、(略)自分はこの一事を見るに於て、中国民族固有の美質なるものを認むるのに吝かではない」。

「吾人の心得て置かねばならぬのは、徒らに外形にのみとらはれて、軽侮的態度を持つのみでは、我が文化事業も失敗に終りはせぬかと心配でならない。(略)今日我々日本人の中国民族に対する通有的軽侮の心念は、此際清算してかからねばならぬと存ずる」(以上、すべてp 21)。

小野は、民衆に根差す「文化的美質」を賞賛するのだが、1章で紹介した石橋俊の見解—故宫などの中国の伝統文化を評価する態度を、さらに「民衆文化」にまで掘り下げた見識と言えらるう。

本稿は、1937年1月から、7月の盧溝橋事件勃発を挟み、翌38年2月までの『同仁』誌に掲載された言説をまとめてきた。その概要を再論すれば、開戦前は、同仁会が展開してきた「文化工作」について、課題も挙げつつ、一程度の自己評価をしてきたが、開戦によって、政府方針に従い、中国への批判を展開していく。しかし、年末の「新政権誕生」に伴って、「戦後復興」に、同仁会がいかに寄与するかが話題となっていく。そのなかでは、日本の「文化工作」が欧米に比べ、貧弱であることの批判・内省が明確に語られていた。さらにまた留日学生また帰国留学生たちへの対応が必ずしもうまく行っていないことも告白され、それらの改善が模索されることになるのであった。

一方、小野の「感想」は、悲惨な戦闘跡を実際に見た上で、西洋的な学知では推し量れない中国民衆の文化的な力量に着目する議論であった。小野によれば、その民衆が強くと求めていることは医学的施療であり、そこにこそ同仁会の役割があるとの視点を打ち出していた点を、本稿では注目しておきたい。

とは言え、同仁会は、その後も「政府声明」の方針、また軍部への協力追

随を避けることはできず、結果として「中国民族に対する通有的軽侮の心念」を清算することはできなかったであろう。そして、中国が「抗日」戦争を継続するなかで、たとえば1940年に成立した汪兆銘政権を評価し、連携を図ることで、自らの任を全うしようするのである。

本稿は、8年続いた日中戦争の開戦1年目における『同仁』誌上の言説しか見ていない。残る7年において、同仁会とその機関誌がどのような言説を展開し、具体的にどのような歴史的な役割を果たしたのかを改めて確認することは、継続課題となる。

[付記] 本研究は、2020～22年度JSPS科研費基盤C・一般(20K02508)「1930～40年代日本における中国人留学生教育」の助成を受けた成果である。

注

- (1) 1938年には、中華民国留学生が1500名前後、満州国もほぼ同数に減り、その後、敗戦までそれぞれ千人台で推移した。中華民国については、傀儡政権からの留学生派遣があり、一定数は継続され続けたのである（日華学会編『中華民国留日学生名簿』各年版、駐日満州国大使館編『満州国留日学生録』各年版による）。1935年から1943年までの具体的な数値は、拙稿「戦時下日本における「満州国」留学生たちの運動会」（『千葉大学国際教養学研究』2号、2018年、5頁）に掲げた表を参照のこと。なお、周一川『近代中国人日本留学の社会史』（東信堂、2020年）は、現在確認できる史料ごとに異なる留学生数についての整理を総合的に試みている。
- (2) 同誌は2013年、大里浩秋、孫安石および見城の三名の監修の下で復刻された（ゆまに書房）。同誌についての研究も進んでいると言えないが、復刻版に所収された3名の解説などを参考にして欲しい。

日中戦争期の日華学会による対応や『日華学報』誌での言説については、別稿で改めて検討していく。なお、筆者は、関連論文として「『日華学報』にみる留日中国学生の生活と日本認識」（前掲『日華学報』（復刻版）第16巻、ゆまに書房、2013年、「太平洋戦争下における留日中国学生の夏季錬成団」『人文研究（千葉大学）』42号、2013年、「1940年の「中華民国留日学生会」

と日華学会』『中国研究月報』No. 800、2014年、「戦前期の留学生政策における日華学会と国際学友会の役割」（佐藤由利子氏と共著）『アジア教育』14巻、2020年、などを発表している。

- (3) 大里浩秋「同仁会と『同仁』」（『人文学研究所報（神奈川大学）』39号、2006年）は、同仁会の概説とともに、『同仁』『同仁会報』の目次を掲げ、きわめて有益である。なお、同仁会が発刊した定期刊行物は、1906年に最初に発刊して以来、休止や名称変更などが複数回あったが、すべて示すと次のようになる。『同仁』（第1次：1906年6月～1916年11月）、『同仁』（第2次：1922年3月～1924年12月）、『同仁』（第3次：1927年5月～1938年5月）。また『同仁会医学雑誌』（のち『同仁医学』）は中国語による：1928年6月～1938年5月）、さらに『同仁会報』（1940年8月～1944年9月）も発行している。
- (4) 先に挙げた大里論文は、同仁会の活動と発刊した雑誌の概要を説明している。また他の先行研究としては、丁蕾「近代日本の対中医療・文化活動—同仁会研究①～④」『日本医学史雑誌』45-4、46-4、1999～2000年）が、中国の近代医学発展に貢献した半面、日中戦争以降は日本の文化的慰撫（文化工作）の一翼を担ったとの指摘をする現状での代表的論文である。近年では、藤田賀久「同仁会と近代日中関係—人道主義と侵略の交錯」『紀要（多摩大学グローバルスタディーズ学部）』8号、2016年などもある。一方、中国側の研究は批判的なものがほとんどで、たとえば王萌「抗戦時期日本在中国淪陷区内的衛生工作—以同仁会為対象的考察」『近代史研究』2016年第5期などがある。

なお、見城は、同仁会が中国語を用いて発刊していた『同仁医学雑誌』（1929～1930年）に連載された「中華民国医界名士録」に取り上げられた106名の「名士」の留学先や現職の特質をまとめた（見城「近代中国における医学者の海外留学と帰国後の活動」『人文研究（千葉大学）』50号、2021年）。また、同仁会が、1935年に発刊した『中華民国医事綜覧』に掲載されている中国の医師者4773名のなかで、海外留学経験者が775名であったことを確認した上で、元日本留学生500名の留学先などを整理した（見城「『中華民国医事綜覧』から見る近代中国の医学者と留学歴」『千葉大学国際教養学研究所』5号、2021年）。さらに日本以外の留学者275名の留学先とその特色についてもまとめている（見城「『中華民国医事綜覧』から見る近代中国の医学者と留学先(2)」『千葉大学国際教養学研究所』6号、2022年）。なお、(1)で欧米留学者の一部の数値を間違えていたため、(2)で正している。

- (5) 小野の経歴などについての情報は少ない。同仁会が発行した『同仁会三十年史』(1932年)、前掲『中華民国医事綜覧』(1935年)の「編輯者」になっていることなどから1930年代において、実務的な幹部であったことは確かである。それ以外は、1889年に東京専門学校(現慶応義塾大学)の英語本科を卒業したことが、「早稲田大学校友会山梨支部」のサイトにあり(<http://waseda-yamanashi.com/sample-page>)、さらに1909年に台湾の「覆審法院檢察局」の檢察官に就いたことが、台湾中央研究院・台湾史研究所のサイト「台湾総督府職員録系統」に見える程度しか分からない(<http://whoith.sinica.edu.tw/>)。ともに2021年10月1日閲覧)。
- (6) 佐藤秀三(1889～1946)は細菌学者。1927年に東京帝大教授となり、1941年には上海自然科学研究所所長も歴任している(泉孝英編著『日本近現代医学人名事典』2012年、医学書院、p 292)。なお、泉編著は、1868年から2019年までの医学関係者3762名を収録する797頁の大事典である。泉はその後、2021年に「別冊」として933名を加えた「別冊」も出している(索引や正誤表を合わせ250頁)。本稿で扱う医学者が、同書に掲載されていた場合は引用紹介することとするが、前者からの引用は『医学人名事典』と、後者は『人名事典別冊』と略記する。
- (7) 中国における同仁会医院設立は、北京医院が初めて1914年のことである。続いて、1923年に漢口医院ができた。さらに、青島医院については、元来ドイツが経営していた医院を軍が接收し、1925年に同仁会に移管された。済南は1915年に創設された診療所を、1925年に同仁会の経営としたものである(『同仁会四十年史』1943年)。
- (8) 石橋俊「眼科患者より観たる中国の医事衛生」『同仁』第11巻第2号(1937年2月号)36～39頁。
- (9) 永井(1876～1957)は生理学者。1915年に東京帝大教授となり、1934～37年は医学部長。退官後、37～39年台北帝大医学部長などを歴任した(『医学人名事典』p 431)。
- (10) 「永井博士の渡支」『同仁』第11巻第5号(1937年5月号)91、95、96頁。
- (11) 「永井潜博士北平大学名誉教授に就く」『同仁』第11巻第6号(1937年6月号)には、大学関係者による歓迎会が5月8日に行われた由の記事が掲載されている(p 85～86)。
- (12) 見城「戦前期 留日医薬学生の帰国後の活動と現代中国における評価—千葉医学専門学校・千葉医科大学中国留学生の事例」『国際教育』第3号、2010

年、p 72、78。また前掲見城「近代中国における医学者の海外留学と帰国後の活動」p 212、213を参照。

- (13) 「許寿裳 (1882～1948)」(徐友春主編『民国人物大辞典 (増補版)』河北人民出版社、2007年、p 1689)。
- (14) 「蔣夢麟 (1886～1964)」(前掲『民国人物大辞典 (増補版)』、p 2250)。
- (15) 「梅貽琦 (1889～1962)」(前掲『民国人物大辞典 (増補版)』、p 1559)。
- (16) 前掲、見城「『中華民国医事綜覧』から見る近代中国の医学者と留学歴」、p 5。
- (17) 武正一(たけまさ・はじめ; 1889～1980)は、1916年に東京帝大を卒業。1925年北京同仁会医院、26年漢口同仁会医院長、1937年に帰国し、東京で開業医。
- (18) 林 (1860～1939) は、外交官、枢密顧問官。1899年駐韓国公使、1906年清国公使、イタリア公使を経て、1916年中国公使。1919年関東府長官、1934年イギリス公使。同年から、枢密顧問官も歴任。(日外アソシエーツ『20世紀日本人人名事典』2004年)。
- (19) 青木義勇『同仁会診療防疫班』(長崎大学医学部細菌学教室水曜会、1975年)は、当時中国で医療活動に携わった医師による貴重な記録である。
- (20) 小野得一郎「北支の旅行より得たる感想 (一)」『同仁』第11巻第11号 (1937年11月)。なお、小野は10月13日に天津に上陸し、天津、北京、保定などを視察し、28日に、奉天に赴いた。また、小野は第12号にも北支の旅行より得たる感想 (二) を寄せたが、そこには (一) と同趣旨の「感想」のほか、この時おこった大水害による「住民窮乏」についても論じ、「治水」などに日本が協力すべきことも語っている。
- (21) 上海自然科学研究所や北京近代科学図書館については、阿部洋『「対支文化事業」の研究—戦前期日中教育文化交流の展開と挫折』汲古書院、2004年。山根幸夫『東方文化事業の歴史—昭和前期における日中文化交流』汲古書院、2005年。佐伯修『上海自然科学研究所—科学者たちの日中戦争』宝島社、1995年、を参照。
- (22) 湯 (1878～1940) は、1902年成城学校で学んだ後、いったん帰国。1910年金沢医学専門学校を卒業。辛亥革命直後の12月、浙江軍政府を代表し、各省代表者会議に出席、臨時議長を経験。1912年北京医学堂の創設準備に参加し、北京医学専門学校校長となる。1915年中華民国医薬学会会長。1922年中華民国北京政府の教育総長および内務総長に就く。1937年臨時政府の議政委員会委員長を経て、1940年汪兆銘政権に合流し、華北政務委員会教育総署督弁などを歴任。(前掲、『医学人名事典』p 415)。

- (23) これら12本以外に、小野得一郎「北支旅行から得たる感想(三)」と龍孫生「四十年前の威海衛」、小野田亮生「幕府御殿医高木濟庵」が掲載されていた。
- (24) 侯毓汶(希民:1882~1974)は、1908年千葉医学専門学校卒業。南京陸軍医院院長、天津市衛生局、北平市衛生局局长等を歴任。中華医薬学会会長にも就いている。(前掲『民国人物大辞典(増補版)』、p 1020)。また、見城「戦前期 留日医薬学生の帰国後の活動と現代中国における評価」(『国際教育』3号、2010年、p 72)も参照のこと。
- (25) 入澤(1885~1938)は、1889年東京帝大を卒業(ベルツに指導を受ける)。1901年ベルツの後任として、東京帝大内科教授に就く。1902年の同仁会発足にも関与。大正天皇の治療担当などをした上、1921年から24年まで医学部長も歴任。1915年から(1938年の死去まで)同仁会副会長。(前掲、『医学人名事典』p 77~78)。
- (26) 孫についての詳細は、現時点の調査では不明。
- (27) 飯島(1868~1953)は、山梨県出身の軍医。日清日露戦争、さらに第一次世界大戦の青島攻略に従軍。1934年関東軍軍医部長、38年軍医総監。39年軍医学校長などを歴任。(前掲、『医学人名事典』p 30~31)。
- (28) 佐多(1871~1950)は、1890年東京帝大に入り、外科や病理学を専攻。1902年大阪府立医学校長および病院長。1914年大阪府立大学長。「今日の阪大の基礎を作り上げた功績は大きい」とされている。(前掲、『医学人名事典』p 287)。
- (29) 前掲、見城「『中華民国医事綜覧』から見る近代中国の医学者と留学歴」、なお、ここから漏れている日本の医学校への留学者数をあげれば、長崎医大が3位の68名、4位は名古屋医科大学(名古屋大学医学部)の39名、九大31名が第5位。その次は岡山医大の24名、東京女子医学専門学校も24名、東京医学専門学校が24名、東北帝大が20名の受け入れをしていた(p 5)。